

浜田沿岸海域における海洋構造の季節変化にともなう “シロイカ”漁場形成位置の地理的变化^{*1} (抄録)

森脇晋平・小川嘉彦^{*2}

日本海南西部の浜田沿岸漁場で初夏と秋の“シロイカ”盛漁期に実施した漁業観測結果に基づき“シロイカ”漁場形成位置と海洋構造との関係を調べた。6月の観測には島根県水産試験場調査船明風(39.43総トン)、10月の観測には同・島根丸(139.06総トン)をそれぞれ使用し、ナンゼン観測による基準深度での水温・塩分ならびに透明度の測定を実施した。初夏には漁場は水深25m~50mの狭い水域に陸岸にそって帯状に形成されるが、秋の漁場は水深75m以深の沖合域に分散して形成される。初夏と秋の“シロイカ”漁場の海洋構造の最も大きな差異は、秋には水深75m以浅の表層に相対的に“高温・低温”な海水が出現し、初夏に漁場全体を覆っていた相対的に、“低温・高温”な水塊は75m以深にしか分布していないことである。これらのことから、秋の“シロイカ”漁場の沖合化は大きくは“シロイカ”の“低温・高温”な水塊への適応を反映した現象であると判断した。また、浜田沿岸という地域的・海況特性との関連では、この海域に出現する“底部冷水”の動向によっても漁場形成位置の変化することが明らかになった。

*1 水産海洋研究会報 第47・48号(1985)に発表した。

*2 山口県外海水産試験場